

日本文化と英語 〈I〉

－日本人と英語の歴史的出会いについて－

安 達 幸 成

INTRODUCTION

It has been said that English language is required not only in high school and junior high school education but in elementary school education. English language has become a very important subject, so it has been studied like a compulsory subject for junior high school and high school. Generally, English language is studied as the first foreign language in university education. Furthermore English ability influences the adoption condition to an employment test and research organization. There is the phenomenon called the word of foreign origin culture of the *katakana* notation centering on English. But concerning on structure and pronunciation, English is not always easy to get used for Japanese people. Therefore when we learn English, we need to think about the degree of familiarity to English and the various problems at the time of study.

【I】日本人と英語との出会い

(1) ウィリアム＝アダムズ

昨今のグローバル化社会にあって、共通語的言語の必要性はとみに強まっている。そのような影響下において我々日本人は、英語の必要性をどのように考えていたのだろうか。まず日本人と英語との出会いやその状況をみることにする。日本人が英語という言語に接したのは、ウィリアム＝アダムズ（英 William Adams 1564～1620）あたりまでさかのぼる必要がある。

彼が日本に到った経緯は次のようである。その目的が日本に行くことではなく、乗っていた船も英国船ではなかった。その目的は東洋貿易のためであり、オランダ船の航海士として

インドを目指していたのである。しかしその途中、暴風雨に遭遇し、二年後の1600年3月豊後(大分県)に漂着した。彼は漂着船を代表して大阪に行き、徳川家康と接見した。時の世界情勢に通じており、かつ科学的教養をもつアダムズは徳川家康に気に入られた。彼はその後、江戸と呼ばれて家康の外交顧問となった。更に江戸は日本橋に家屋を拝領した。こうしてアダムズは、家康・秀忠の2代にわたる将軍の側近として仕え、通訳・外交文書翻訳・洋式帆船の建造・数学や天文学などの幅広い技能で仕えた。やがて母国英国から船隊が国王ジェームス1世の親書を携えて来航した。その時も相方の通訳として活躍した。これが日本最初の英文和訳・和文英訳であるとされている。その時、アダムズの使っていた英語は、『初期近代英語 (Early Modern English, 1500~1700)』である。これをきっかけとして始まった日英貿易であったが、オランダ商館との競争に敗れ、アダムズの没後3年でイギリス商館は平戸から撤退することになった。このアダムズ存在は、日本人が英語という言葉に触れた最初であったと考える。アダムズは、日本橋以外にも相模国三浦郡(神奈川県横須賀市逸見)に、領地を与えられたので日本名の姓を「三浦」とし、航海士という意味をもつ「按針」をその名とした。

(2) フェートン号事件

1600年9月、日本の戦国時代的群雄割拠時代から、統一国家への転換期にもあたる関が原の合戦が起きている。この時期に日本国内での一部の人間であるにせよ、日本人の身近で英語が話されていたことは事実である。

しかし、英語が多く日本人に係わりを持つようになったのは、ウィリアム＝アダムズの漂着から200年後の1808年、イギリス船フェートン号(Phaeton)が長崎に入港し、「フェートン号事件」とよばれる事件が起こったことからであった。1808年8月15日、オランダ国旗を掲げて長崎湾にイギリス軍艦が侵入したことにはじまる。母国船と思いこんだオランダ商館人を人質に、飲料水・食料を要求したという事件である。この海賊行為的不法行為に対し、長崎奉行は激怒したが、これに対抗するすべがなかった。そしてフェートン号は、3日目に長崎港を出ていった。時の長崎奉行の松平康平らは、国法を守れなかったとして切腹した。また長崎港の警備は佐賀藩であったため、幕府は佐賀藩の警備怠慢を理由に、第9代藩主鍋島齊直に100日間の謹慎を言い渡した。

これを契機として、港の防備施設を強化及び意志疎通のための、英語学習者養成の必要性を痛感した幕府は、長崎のオランダ通詞らに英語の研修を命じた。これが日本での英学の発端となり、日本英学史はここから始まると言われている。当時(1809年)日本に50人ほどいたオランダ通詞の中で、英学を学習することの幕命をほぼ全員が受けたのであった。

7月には、かつてイギリスに駐在したことのある、ヤン＝コック＝ブロムホフがオランダ商館員として来日した。この時、彼から『面名口授(オーラル・メソッド)』による英語学習を受けた通詞達がいた。彼は日本における英語教師の第1号であるといえる。しかし彼はオランダ人のため、俗に言うネイティブではなかった。しかし、ブロムホフの指導を受けた通詞たちは、研修開始から僅か2年で英語入門書『諳厄利亚興学小筌』、5年後には『諳厄利亚語林大成』を作り上げるまでになっていた。

ブロムホフからの研修によって日本人通詞たちが作成した英和辞書『諳厄利亞語林大成』は、当時としてはかなりの大事業であった。しかしそれは収録語数約6,000語の、現代の高校生なみの単語集であった。その後1862年、幕府の洋学研究機関として存在した洋書調所から『英和对訳袖珍辞書』が刊行された。収録語数は37,000語であった。初版は、堀達之助を編集主任とし、西周助、千村五郎、竹原勇四郎、箕作禎一郎らの助力を得て編纂された。

H.Picard編の英蘭辞書『A New Pocket Dictionary of the English and Dutch』の1857年版を元に、そのオランダ語訳の部分英蘭辞書である『英和对訳袖珍辞書』を日本語に置き換え、英和对訳の形にしたものである。よって『英和对訳袖珍辞書』を日本初の英和辞書とすることもある。ちなみに袖珍とは、『Pocket Dictionary』をそのまま訳したのであるが、実際にはかなり大きいものになり『枕辞書』とも俗称されていた。

当時の日本は鎖国政策をとっており、オランダ国籍船だけにしか入国を許可していなかったものである。従って、オランダ語に対する通詞者はいても、英語の通詞者はいない状態であった。

(3) ラナルド・マクドナルド（米国人）

この「フェートン号事件」から40年経った1848年、漂流民を装って北海道・利尻島に上陸した男がいた。それがインディアン系アメリカ人ラナルド・マクドナルドである。彼はインディアンの遠い故郷は日本であると信じ、日本を訪れようとしたのである。当時ハワイを基地に年々増加していた捕鯨船に乗り込み、日本近海でボートにのりうつり漂流者に成りすましたのであった。上陸後、彼は先ず長崎に護送され、そこで奉行所の取り調べを受けることになった。そのときのオランダ語通詞は森山栄之助であった。彼は英語が少し話せた。ラナルド・マクドナルドは、鎖国の禁を犯した犯罪者であるため、通詞森山栄之助をはじめ13名の通詞仲間がその任にあたっていた。彼等通詞達は、英語を学ぶことに強い関心を持っていた。一方、マクドナルド自身も日本語に関心を持っていた。そこで森山はマクドナルドと日本語、英語の交換授業を思いつき、牢格子越しにその授業は行なわれた。これは日本人が直接アメリカ人を教師として英語を学んだ最初であった。先のブロムホフはネイティブではなかったから、このマクドナルドは日本初のネイティブスピーカーとしての英語教師ということになる。この交換授業も翌年4月、漂流者を引取りにきたアメリカ軍艦プレブルにマクドナルドが引き渡されたことによって終わった。マクドナルドは、帰国後『日本回想記』を著わし、1849年に没したといわれている。

森山らは、35年前に日本人の手で作られた『諳厄利亞語林大成』の写本をマクドナルドの元に持ちこみ、そこに出ている単語を発音することによってそれを訂正していった。それはマクドナルドが引き渡される時、マクドナルドから学んだ英語が役に立ったと言われている。日本英学史学会編『英語事始』に、「マクドナルドと通詞たち」として、次のように伝えている。「米国の北太平洋捕鯨の最盛期1840年代に、その捕鯨船プリマス号に便乗して日本に入ることを思いついたのが、じつにラナルド・マクドナルド青年であった。彼が同船長と交わした契約は、日本の近海で難破を装って下船するという計画であった。彼が上陸したのは1848年6月27日、母船を離れて4日目の7月1日に利尻島に上陸、9月上旬松前に連れて行かれ、江差で幽閉され、10月長崎送りとなる。長崎では軟禁されていたが、蘭通詞たちに英語を教

えたので、むしろ大切にされた。翌年4月5日、米軍艦プレブルで長崎を離れるまで、足掛け半年、正味100日ほどであるが、彼は日本人にはじめて生の英語 (living English spoken by native speaker) を教えたわけである。」

(『エンサイクロペディアブリタニカ (ジャパン) 1976, 7』)

とにかく日本人がネイティブスピーカーに英語を習ったのはこれが最初であり、それはアメリカ英語であった。

(4) ジョン万次郎

アダムズ (英)・マクドナルド (米) などが、日本人の英語への関心を強めたことは事実である。その一方で英語に直に接し、かつ日本に英語を持ち込み、日本人の英語学習や通訳に深くかかわった日本人がいた。その一人は中浜 (ジョン) 万次郎である。

中浜万次郎は、土佐の漁師である。1841年14歳の時、足摺岬沖で漂流し鳥島に漂着し、米国捕鯨船に救出され、そのまま米国に連れて行かれ米国でしばらく生活した記録に残っている日本人としては彼が最初であろう。彼は「ジョン・マン」と呼ばれ、彼を助けた捕鯨船長ホットフィールドの厚意によって、米国で初等・中等の教育を受け、英語・数学・航海学・造船学などの高等教育も受ける機会を得た日本人留学生第1号でもあった。また、彼は3年4ヶ月の間、捕鯨船の副船長として世界の海で活躍した。24歳の時、鎖国中の日本へ帰国することを決意し、ハワイ経由で琉球に上陸した。しかし、鎖国の禁を犯した罪を問われ、長期間の取り調べを受け、土佐藩からは「他国往来ハ勿論、海上業等被差留之」と幕命を受けた。しかし当時の土佐藩主山内容堂から藩校の教授方となり、米国の文化事情や経験による世界状況の見聞の話をして、土佐藩士などに大きな影響を与えた。2年後米国ペリー提督の浦賀来航時、幕府は万次郎に対して、出頭を命じている。しかし、万次郎は米国の教育を受けているために公式会議には出席を許されなかった。条約交渉の裏で条約締結に活躍したということである。ほかの通詞たちは、『Commodore Perry』をオランダ語なまりで『コムモドル・ペリ』と読んでいたのに対して、万次郎は『カマダ・ペリ』と発音していたという。その後1855年に米国航海学書『ボーデッチ航海学書』の翻訳を著わし、1859年には英会話書『英米対話捷徑』を編集した。そして1858年に締結された日米修好通商条約の批准書交換のため、1860年に我が国最初の大使使節団が渡米することになった。米国軍艦ポウハタン (Powhatan) 号に使節一行77名が乗船し、幕府海軍の咸臨丸が随行した。咸臨丸には提督として木村愼津守喜毅、艦長に勝海舟、仕官17名、水夫、従者など総勢96名が乗船していた。加えて咸臨丸には、万次郎はじめ福沢諭吉、小栗忠順、笹倉桐太郎、榎本武揚などがいた。米国の一等航海士の資格を持つ万次郎は、通訳はもちろんのこと咸臨丸の運行そのものも支えた。艦内では、福沢諭吉がことのほか英語学習に熱意をこめた。この米国訪問で万次郎と諭吉は、アメリカ辞書『ウェブスター』(簡約版)をそれぞれ1冊ずつ購入した。当時はその「ウェブスター」を「ウェブストル」と呼んでいたらしい。帰国後、英語をはじめ航海学、測量学、数学などの指導にあたった。やがて土佐藩主島津斉彬の依頼により、鹿児島で薩摩開成所で海軍増強のための指導にあたった。また長崎では、土佐藩のために後藤象二郎らと上海へ船舶の購入に奔走した。明治初めには、東京大学の前身である開成学校の教授に

も任命された。さらに明治3年8月、普仏戦争視察のためヨーロッパへ大山巖に随行した。やがて、明治31年11月、波乱に富みかつ日本と米国との関係をより強めた万次郎は71歳で生涯を閉じた。

上述したとおり、ブロムホフはオランダ人だったので、彼の英語はオランダなまりがあった。だから英語の発音と比較すると、随分異なっている。それは万次郎から習ったオランダ語通詞たちがまとめた英語入門書『諸厄利亜興学小筈』からも分かる。ジョン万次郎は、アメリカで英語を母国語とするネイティブに習っているために、『諸厄利亜興学小筈』から48年後、彼の著わした『英米対話捷徑』をみるとそれは明確にわかる。前者は日本で最初の英学書であり、後者は日本最初の英語会話教本である。前者のアルファベットは英語であるが、ブロムホフの影響からか、カタカナで表記している発音は英語らしくないといえる。ところが後者のカタカナ表記の発音は、語句や文の表記がアメリカ英語の発音を伝えている。表記そのものは、現代とはかなり隔たりがあるが、その表記を詳しく調べて行くと、表記自体に体系的なものが感じられる。

万次郎は、10年近いアメリカ人との生活で身につけたアメリカ英語を話していたと思われる。

エ	ベ	セ	ヲフ	ズイ	ラタア
A	B	C	of	the	lettr
コシチャン	ハラ	メニ	ラタシ	アー	ザヤ
Q	How	many	lettrs	are	there
アンシャ	ザヤ	アー	ツーエンテ	セキス	イン エンゲレス
A	There	are	twenty - six	in	English

(『英米対話捷徑』)

ラタア (Lettr) は (Letter) のスペルミスであろう。コシチャン (Q)、ハラ (How)、ヌフ (of) などは、現代の発音表記が身につけている我々にとっては少々滑稽な表現のように思われるが、万次郎はこの当時、相手の発音するものに対し、聞こえるままに表記したのである。注目すべきは [s] と [ʃ] の音であり、アンシャ (Answer) のシは、「S」の音に、またエンゲレス (English) の「ス」は「ʃ」のように詠みかえると現代の発音が再現できてしまうのである。

【Ⅱ】 アルファベット発音

(1) alphabetの読み方

万次郎が残したアルファベット発音表記の一つとしてこの『英米対話捷徑』では次のように記録されている。

エイ シイン ヲフ スイ ア ベ セ
A sing of the a b c

このようにABCの歌詞を書き、「彼国童児ニ教ユルニ如此節ヲナシテ是ヲ復誦ナサシム」とあるように、子供達にアルファベットを歌にして学習させたとしている。

アメリカではアルファベット (alphabet) をどのように発音していたのだろう。仮名標記でアルファベットを比べてみると次のようになる。

	①	②	③	④	⑤
A	エ	ア	エー	エ	エー
B	ビ	ベ	ビー	ビー	ビー
C	シ	セ	シー	シー	シー
D	ディ	デ	リー	ヂー	ディー
E	イ	エ	イー	イー	イー
F	エフ	エフ	エフ	エフ	エフ
G	ゼ	ゲ	ヂー	ジー	ジー
H	エーチ	ハ	エイチ	エーイッチ	ヒーエチ
I	アエ	イ	アイ	アイ	アイ
J	ジィ	イー	ゼイ	ゼー	ゼー
K	ケ	カ	ケー	ケー	ケー
L	エル	エル	エル	エル	エル
M	エム	エム	エム	エム	エムミー
N	エン	エン	エン	エン	エンニー
O	ヨー	ヲ	ノー	ヲ	オー
P	ピ	ペ	ピー	ピー	ピー
Q	キョ	キュウ	キウ	キュー	キュー
R	アル	エラ	アー	アール	アル
S	エス	エス	エシ	エス	エス
T	テイ	テ	チー	テー	ティー
U	ユ	ユ	ユー	ユー	ユー
V	ウヒ	ユフ	フヘー	ヴキ	ヴキー
W	ドブヨ	ドブルドユフ	タブリョ	ダブルユー	ウッドブリュー
X	エキス	エックス	エキシ	エキス	エキス
Y	ウワイ	エイ	ワイ	ウハイ	ワイ
Z	イチセツト	セイト	ジー	ズイ	セーセツト

①『語厄利亜興学小筈』 本木正栄 蘭学通詞十余名 1811

②『改正増補 蕃語箋』 箕作阮甫編 1848

③『英米対話捷徑』 中浜万次郎 1859

④『改正増補 英語箋』 石橋政方訳 1861

⑤『洋学指針 英語部』 柳川春三 1867

上記のように、中浜万次郎訳『英米対話捷徑』では、アルファベットにかなをふって、「エー ビー シー リー イー エフ ダー エイチ アイ ゼイ ケー エル エム エン ノー ピー

キウ アー エシ チー ユー フヘー タブリョ エキシ ワイ ジー」となっている。「T」は「チー」、「D」は「リー」と紹介している。他の資料では、「D」は「デイ」・「ディー」・「デー」となっている。また「O」を「ノー」と発音したのは、前の「N」から続く発音として紹介したのであろう。更に「Z」は「ジー」としている。『蛮語箋』などでは、「セイト」のように現代発音「ゼット」と同じタイプである。彼の発音はアメリカ英語がそのまま紹介されていると言ってよいであろう。ただ万次郎の「V」の発音表記は「フヘー」とありかなり苦勞した表記である。2年後に刊行された『英語箋』には、「ヴキ」となり、現代の「ヴィ」に近い表記になった。中浜万次郎訳『英米対話捷徑』では、「thirteen」は「サチアン」、「pretty」は「プロテ」、「misty」は「メステ」で、「ti」の音写については、チ系・テ系の二つがある。或いは長音がチ、短母音がテと思われる。「Lady」は「レーデ」、「dissipated」は「デシパーテ」となる。

『増訂 新語学独案内』（エフ・プリンクリー著 三省堂1909年刊）では、アルファベットは次のようになっている。

「エー ビー シー デー イー エフ ジー エーチ アイ ジュー ケー エル エム
エヌ オー ピー キュー アール エス テー ユー ヴィ ダブルユー エキス
ワイ ズイ」

これは現代の発音感覚に近い音写をしている。榎垣実は『日本外来語の研究』（1966年 東京堂出版 p112）で次のように述べている。

明治期には気取った風に響いた外来語も、大正期になると極く自然に聞こえたのである。…………たとはば [ti] [di] [si] [fi] [e] [fo] などの音節が自然に発音できるようになったのは、この期の末ごろからであろう。

これを考えると昭和の一般的教養階級では、すでに [T] は [ティー]、[D] は [ディー] と発音していたのであろう。[T] の発音は [テー] よりも [チー] の方が古いのであろう。

(2) アメリカ進駐軍英語

戦前の日本では、キングス・イングリッシュが英語の主流とされていた。その一方で、米國文化の流入、アメリカ人宣教師や米國ミッション・スクールなどから、アメリカ英語の影響が次第に強くなり始めていた。戦後の日本文化は、アメリカの政治的影響のもとに伝統的日本文化へのさまざまな影響を強く受けはじめ、それとともにアメリカ英語の影響も一層強まった。中でも直接日本人に与えられたものとして進駐軍のアメリカ兵英語がある。GHQ, MP, GI, PX, DDTなどのローマ字略語から「ハバ ハバ」（早く早く）、はてはアメ横のアメリカ製品のやみルート販売など、まさにアメリカ文化横行の時代があった。新人映画女優は「ニューフェース」としてPRされ、洋モクの「ラッキーストライク」、「キャメル」はア

メリカタバコの代表的名称として紹介された。このようなアメリカ英語は、日本人にとって身近なものとなり、そのまま新しい日本の文化として根付き始めていた。

【Ⅲ】 カタカナ表記と外来語

(1) 英語のカタカナ表記日本語

日本語文字（特にカタカナ文字）は、外来語を表音表記しやすいと言われる。最近我々の身近な周りでますますカタカナ英語としての外来語が氾濫してきた。身の回りどこを見渡してみても、カタカナで表記された英語からの外来語が目につくようになった。もちろん英語のほかにフランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語などのカタカナ表記の外来語があふれている。加えて、外国語を日本語発音し、それを日本語として使用しようとする傾向も顕著である。その場合の表記は、必ずカタカナ表記である。そのカタカナ表記の外来語を、日本語の会話や文の中に入れて表現するのがステータスである、と思い違いしているのではないかと疑うほどである。石野博史は『現代外来語考』（大修館書店）で、1980年代前半の外来語の使用状況として、「ファッション97% 美容86% 食生活84% スポーツ76% オーディオ74% 住宅67%」という高率をしめているという。最近の傾向をみると、更にIT・車両・マスコミなどの項目を加えて、この率が一層高くなっているはずである。

特に明治時代以来、日本語としての外来語にカタカナ表記語が増加の一途をたどっている。この原因として、日本人の外来語好きというのか、または日本語そのものが外来語を受けやすい性質を持っているのか、更には日本文化そのものが元を辿ると外来文化であることに起因するのか、或いは他の理由によるものか明確な判断はできない。

よく考えてみると、外来語といった時、すぐに分かるのはカタカナ表記なのであるが、必ずしもカタカナ表記語のみではないのである。例えば、「天」・「梅」などは中国語発音の影響、「瓦」・「達磨」・「旦那」などは、「袈裟」・「釈迦」・「和尚」・「菩薩」などと共に仏教用語として日本に伝来したものである。もとは古代インドのサンスクリット語であったものが、中国を経由し、中国語表記のまま伝来され日本語として定着したものである。これらは当時において、新しい文化を取り入れるための用語として、日本人が日本語として取り入れたものである。しかし、現代においては、時が経っているために、むしろ古来より存在した日本語であるという感がする。このような本来的に日本語としての認識を受けているものに、「鮭」（アイヌ語）・「合羽」・「襦袢」などがあがる。これはもとの言語がポルトガル語である。「合羽」（カッパ）は、英語の「cape」と同じ語源であるようだ。

(2) 日本文化としてのカタカナ表記外来語

『外来語辞典』で榎垣実は、「日本語に取り入れられた外来語の最も古いものといえば、まず漢語ということに落ち着くだろう」と言う。しかし、漢語は日本の文化の基礎を形作っている伝統的な語とさえいえよう。先に挙げた「鮭」（アイヌ語）・「合羽」・「襦袢」などのように漢字表記の日本語として定着を見せると、日本人は既にそれが外来語であるという感覚が無くなってしまう。カタカナ表記の外来語が、徐々にそのような方向を取りつつあるのではないだろうか。榎垣実は『外来語辞典』の中で、次のように言っている。

日本の文化的発展は要するに外国文化の刺激と影響に拠るものだったような気がする。もちろん独自のすぐれた文化を作りだしはしたが、外国文化の影響下に長らく置かれてきたことも事実だ。そんな状況では、外国を崇拜する気風・舶来を尊ぶ気持ちが、国民の心に深く強く植えつけられるのが当然だった。出来あがったものを真似てそれに磨きをかける方が、独創より安易なので、その安易な道にいつかなれきて安住したような所がある。それが習性となって外来語をも無反省に愛好するのではなかろうか。その風潮は一朝一夕に抜ける筈はない。

これは聖徳太子以来の日本文化としての伝統的な外国文化受容の特徴とも言えよう。常に外に目を向けて、自国にとって有益な文化を探し、それをとり入れて自国文化として消化しやすい形とする。完全に元の形を無くして自国流に変えてしまうのではなくて、原型を残しながら日本的に形を変えるのである。それゆえ、その言葉の持つ本来の意味との間にズレが生じ、もはや外国語ではなく日本語としてしか通用しない。日本人が日本語的発音で、外来語を発音しても、それは外国人には通じない奇妙なコトバなのである。日本人は、そのように外国語をカタカナ表記的に使用することによって、外来文化として取り入れることになり、それが文化的刺激と感じ、先進的とさえ感じるのである。いままで日本はそうにして外来文化を取り入れてきたし、それは今後も続くであろう。

(3) カタカナ英語的外来語は日本語

しかし日本が、経済的、技術的、文化的に他の国々に影響を及ぼすようになると、このような外来語が日本語・日本文化・日本経済を表す語として逆輸出されることになる。そのようなカタカナ表記の日本の外来語は、次々につくられ、その量を増やす一方である。

『広辞苑』（岩波書店）の第1頁にでてくるカタカナ表記の外来語は、実にその頁の中で50%に近い。例えば、第一頁にはアーヴィング、アークライト、アーカンソー、アーケイック、アーチ、アート、アーティフィシャル、アートマン、アルバイト、アーベル、アーマチュア、アーミンなどのカタカナ外来語がみられる。もちろんこれは日本語の辞典であるから、日本語として使用されるカタカナ外来語としての掲載である。一般的には名詞使用なのであるが、中にはコミュニケーションのような元来の動詞や本来は形容詞なのだが、日本語の助詞がついて名詞的に使っている。例えば、ホット、シビア、クール、ポピュラー、クリエイティブ、リバーシブルなどやファンタスティック、エキゾチック、アブノーマル、ショッキング、センセーショナルなどの語であるが英語のレベルとしてもかなり高度であるといえよう。この傾向は近年ますます高度さを増しているのは『現代用語の基礎知識』（2002年版）などをみるとそれは顕著である。外来語のカタカナ表記については、今迄述べてきたのであるが、英語入門書『諸厄利亞興学小筈』や『英米対話捷徑』のように、19世紀初めか20世紀にかけて英語教育に万国音標文字が利用されるようになるまでは、外来語というより英語の発音そのものをカタカナで表記していた。カタカナ・ひらがなができるまでの万葉仮名のようないわゆ

る音標文字の役割なのである。これと同じ方法で20世紀初頭の英語の教科書は、その発音をすべてカタカナで表記していた。

現在日本人は、カタカナで外来語を表記しているが、日常会話において元来日本にあったかのごとく、それらの言葉を使用している。同時にそれらの外来語は英語であるということも知っている。つまり、「テープレコーダー」、「スクール」、「カンパニー」、「テーブル」は「tape recorder」、「school」、「company」、「table」であることを認識しているのである。しかし、こうした外来語の多くは所謂「日本語」になってしまっているといえる。

明治時代において、多くの外来語が使われ始めた。例えば「ラムネ」という言葉に注目する。ラムネは1860年頃にイギリス商船により、長崎にもたらされたといわれているが、一般に広まったのは1880年（明治21年）頃と言われている。ラムネはlemonadeの語尾「de」の発音が省略され、語頭の「l」が「ラ」の発音に聞こえて「レモネード」が、「レモネ」、「ラムネ」に変化し、「ラムネ」となり定着したのある。ラムネの呼ばれる以前には、炭酸ガスが泡立つ様子から「沸騰水」などと呼ばれたり、飲むと舌がジンジンと冷たくてヒンヤリすることから「ジンジンビア」と呼ばれたりすることがあったようである。その後大正時代には、全く別のものとして、そのスプリングから「レモン水」と言う意味を持つ「レモネード」という言葉が広まり、元々同じ言葉であるのに二つの異なった意味を持つカタカナ外来語が生まれたのである。そのような言葉は他にもいくつか存在する。例えば、「iron」は「アイロン」とゴルフの「アイアン」、「strike」は「ストライク」と「ストライキ」などである。スプリングからできた言葉「レモネード」と、耳から聞こえた発音による言葉「ラムネ」の二つの言葉は、カタカナ外来語と呼ばれているが、これらはもうすでに本来の意味とは別に造られた日本語であるといえるであろう。

(4) 評判の悪いカタカナ英語的外来語

しかし英語をはじめ外国語を日本語の中にカタカナ語としてどんどん取り入れ、一見日本語の国際化・英語化のように見えるが、このカタカナ外来語は英語のネイティブの人たちには大変に評判が悪いようである。日本人は英語を母国語とする人たちに対して、英語をカタカナ表記の日本語化した言葉を、相手の理解を容易にするつもりで使用しても、相手にはほとんど通用しないのが事実である。もちろん、カタカナ外来語を原語に忠実に発音していれば別なのである。しかし、日本語式に発音された外来語は、彼等にとってむしろ日本語の単語よりも難しいであろう。元駐日大使エドウィン・ライシャワー博士は、その著『日本人』(Reischauer, E.O.: The Japanese, Tuttle, 1977, p396) でカタカナ英語はかえってその障害になっていると言う。彼は日本語としてのカタカナ英語の特徴として、①日本人のカタカナ英語（外来語のカタカナ表記）はいわゆる知識人的ハイカラ趣味 (stylish) である。②英語は日本語に新しい概念や思想を与えた。③カタカナ英語（外来語としてのカタカナ表記）は、日本語の根底を脅かすものではない。④日本人のつくりだすカタカナ英語は、英語を母国語とする者には理解できない言葉として認識される。このようにまさに日本人とその文化の受容形態の問題点を鋭くついている。

和製英語の増加は、日本語の根底を破壊してしまうのではないかという疑問に対しても、

ライシャワー博士は、その心配はないと言う。日本語では、どんなに外来語を受け入れても、総て名詞として受け入れる。だから日本語としての文法的枠組みはそのままであり、変化しないのである。例えば、英語の「drive」という動詞が日本語の中にとり入れられる場合、「彼女はドライブします」となり、「彼女はドライブ」とはならない。英語の「drive」という動詞が、カタカナ表記の外来日本語として変わる時には、「～する」という助動詞を補わなければならないのである。英語の場合には、事情が異なる。例えば「author」（本の著者）という単語は、「He author a book」と言うと、「author」は（本を書く）という動詞になる。同じことは、「question」は名詞の「質問」と動詞の「質問する」、「station」は名詞の「駅」と動詞の「駐屯する」という意味がある。英語からの外来日本語はほとんど総てが名詞として入りこんでいる。形容詞として使用する時には、「ゴージャスな」「ナウい」などと「～な」「～い」を補って形容詞として使用している。特殊なもので、「ダブる」「デモる」「アジる」など「～る」を伴って動詞を作る場合もあるが数限られている。これらを見ると、変化しない語幹の部分の名詞的に使用しているにすぎないのである。だからこれらのカタカナ外来語は日本語の構造を破壊するような因子とは成り得ないというのである。だから我々日本人は、英語の外来カタカナ表記語も漢字の合成語と同様に何の抵抗もなく使用しているのである。例えば、「走る」「駆ける」は、「走行する」「競争する」「ランニングする」「マラソンする」「ジョギングする」など表現が変化しても、その部分は変化しない語幹部分であり、変化する語尾部分は必ず日本語で「～する」でくくられるのである。だから、「走行」「競争」「ランニング」「マラソン」「ジョギング」などは、総て名詞としての役割をもつだけであり、和語の「はしる」「かける」という意味内容とその文法的位置付けには変化がないのである。

このいわゆる和製英語と言われるカタカナ表記の外来語は、昔からのものもあるし、最近作られたものもある。中には語感を良くするために、元の言葉からわざと変えているものもある。問題は、アメリカ人など英語圏の人と《英語》で話すためには、非常に障害になるということである。日本人にとっては、英語のようだけれど、話し相手のアメリカ人などに通じない言葉は沢山あるし、これからも増えてくるような傾向にある。例えば、次のような和製英語といわれる語である。

Japanese - KATAKANA -	Alphabet	English in US
アフターケア	after-care	service after the sales
オープン トースター	oven toaster	toaster oven
エアシュート	airchute	chute
オーダーメイド	order maid	made-to order
キー・タッチ	key touch	key stroke
キスマーク	kiss mark	hickey
キャッシャー	casher	cashier
キャンピング カー	camping car	camper

クーラー	cooler	air-conditioner
グラウンド	ground	playground
ゴールデン アワー	golden hour	prime time
スイムスーツ	swimsuit	bathing suit
スクランブル	scramble	diagonal crosswalk
スタンドカラー	stand collar	stand-up collar
スタンドプレー	stand play	gland stand play
スピード・ダウン	speed down	slow -down
スリーサイズ	three-size	vital-statistics
セレモニー	ceremony	master of ceremonies
ジーパン	G-pan	jeans
チークダンス	cheek dance	cheek-to-cheek dance
トレーナー	trainer	sweat shirt
ドア・ストッパー	door stopper	door stop
バトンタッチ	baton touch	baton pass
パンツ	pants	underpants
ブラインドタッチ	blind touch	touch-type touch-system
フライパン	fry pan	pan
フルーツパーラー	fruit parlor	fruit bar
フレンド・マッチ	friend match	friendly match
ヘアピン・カーブ	hairpin curve	hairpin turn
ベビー・サークル	baby circle	playpen
ベビーカー	baby car	stroller
ビデオデッキ	video deck	video cassette recorder
ホッチキス	hotchkiss	stapler
ポケットベル	pocket bell	pager/beeper
マイホーム	my-home	owned house
マニキュア	manicure	nail polish
モーニングコール	morning call	wake-up-call
マイナスドライバー	minus driver	regular flathead screwdriver
モヒカンカット	Mohican cut	Mohawk
レンジ	range	stove
ワンピース	one-piece	dress
ワイドショウ	wide-show	talk show
ワンルームマンション	one-room mansion	studio apartment
リンス	rinse	conditioner

かつて日本政府の代表が、国際海洋会議に参加した時のことである。会議は共通語として英語が使われ、日本語の同時通訳はなかった。その時の検討議題の一つに、「オットセイ」に係わる条約の内容検討があった。ところが、日本代表のスピーチの中で「オットセイ」という単語が相手に通じなかった。その代表は発音をいろいろと替えてみた。英語母音の (a) (ə) (ʌ) や二重母音の (ou) を発音してみても通じなかった。後で辞書を引いてみたら、「オットセイ」は英語ではなく、アイヌ語を語源とする、れっきとした日本語であることが分かり、驚きを禁じえなかったという。オットセイの語源はアイヌ語の「オンネブ」であるとされる。これが中国で「臘腸」と音訳され、下腹部が薬として重宝されたことから「臘腸臍」の名で日本に入ったのである。その後読み方である「オントッセイ」の「オン」が変化してオットセイになったと言われている。英語では「seal」、「fur seal」、「harbor seal」、「sea cat」、「sea lion」などと表現されている。

戦後日本でカタカナ英語が日本語として入り込み、増加の一途を辿っている。これは日本語を豊かにするものであり、「アレンジ」「エントリー」「カルチャー」「アイデンティティー」「ノーマル」などの言語が生まれたことにより国際化に向けて有意義であるという考え方もあるという一方で、そのようなカタカナ英語を使用しなくても日本語としての和語・漢語が既に定着しており、更にこのようなカタカナ英語の使用は、日本語の乱れが原因となるという考えもある。この考え方は、カタカナ英語は、英語本来の意味・遣い方・発音などが変化してしまっており、むしろ既に英語ではなく日本語として機能している。このような和製英語は、英語学習にマイナスであるという。例えば、「ベビーカー」は、直訳的日本語では「赤ちゃん用自動車」となる。これでは英語圏の人は分らない。英語では「baby buggy」「baby cart」「baby carriage」と言わなくてはならないのである。外来語は、外国語が日本語に入り日本語化したものである。だから外来語の発音は、原語発音から大きく離れて、むしろ日本語としての発音形態となっているのである。英語と日本語との構造的違いは、音節構造・アクセントの性質の種類などの相違なのである。

—CONCLUSION—

There are a lot of *katakana* words derived from foreign language that Japanese people use as Japanese words. But these *katakana* words (including its meaning and pronunciation) are not already English words but Japanese words. Japanese hope that there are many English words in daily life, and hope to know many English. While being satisfied with leaning English, there are many Japanese who are not able to master English. Japanese people have strong motivation of leaning English and have some knowledge of English. Also they are very interested in English language. However for Japanese people, there are a little courage, effort and necessity to use English language in daily life. This is why Japanese people have weakness of English language.

REFERENCES

- ・『エンサイクロペディアブリタニカ (ジャパン)』1976, 7
- ・本木正栄ら蘭学通詞十余名『諸厄利亜興学小筈』1811
- ・箕作阮甫編『改正増補 蕃語箋』1848
- ・中浜万次郎『英米対話捷徑』1859
- ・石橋政方訳『改正増補 英語箋』1861
- ・柳川春三『洋学指針 英語部』1867
- ・エフ・プリנקリー『増刷 新語学独案内』三省堂1909年版
- ・榎垣実『日本外来語の研究』1966年 東京堂出版 p112
- ・石野博史『現代外来語考』大修館書店 1983年12月 p43
- ・榎垣実『外来語辞典』
- ・『広辞苑』岩波書店 第一項
- ・『現代用語の基礎知識』2002年版 自由国民社
- ・Reischauer, E.O『日本人』1977, p396
- ・佐久間治『英語の語源のはなし』2001年 5月 研究社
- ・『外来語和英辞典』1990年 八潮出版社